所　報　いわみざわ
第１７７号
令和７年10月17日発行
岩見沢市立教育研究所
Iwamizawa education Laboratory

教育研究所　所報「いわみざわ」第１７７号をお届けします。

教育研究所の研究部会の中間報告第一弾として、「教科等」研究部会と「外国語」研究部会の記事を掲載します。

「教科等」研究部会の中間報告　　部長　髙　橋　　周

テーマ：仲間の声を受けとめ、考えを深める子どもの育成
～声がつながる授業の創造を通して～

１　テーマを具現化する研究の視点

昨年度の研究をもとに、実践研究に取り組んでいます。５人の部員が各研究テーマに基づき、それぞれの研究視点を掲げて実践と交流を繰り返しています。

１１月ごろに実施予定の小・中の代表者による「声がつながる」授業の公開を通して、テーマの具現化を目指しています。視点に関連する以下の５つの要素がどのように機能し、連携するかを検証しています。

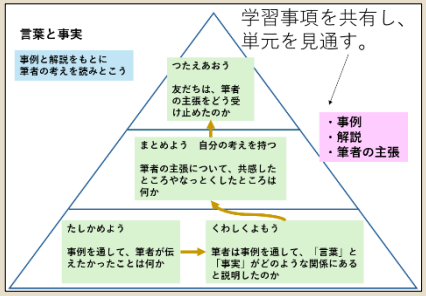
視点１　学習規律
「学習規律を『守る』だけでなく『決める』ことは自己規律の育成につながる」
視点２　学習事項
「学習事項から単元を見通すことは、主体的・対話的で確かな学びにつながる」
視点３　交流
「明確な意図をもって交流することは、学習意欲を高め、自己決定を促すことにつながる」
視点４　教師の発話
「教師の指示・発問・説明を明確にすることは、子どもが安心して発言し、自己の考えを深めることにつながる」
視点５　振り返り
「他者の意見を取り入れた振り返り活動は、新たな気づきと自己調整力の育成につながる」

２　研究実践の具体

研究部員がそれぞれ以下のテーマで実践と検証を進めています。

（１）学習規律

「守る」だけでなく自ら「決める」ことで、自己規律を育むことを目指します。学級内でのハンドサインや共通言語を活用し、子どもたちが学習規律を創り出すプロセスを明らかにします。



（２）学習事項

学習事項から単元全体を見通す活動を、単元初めに取り入れるなどして、子どもたちの主体的な学びへとつなげる方法を探っています。

（３）交流

「明確な意図を持った交流」が、子どものやる気や自己決定を促すことにつながるか検証しています。教師のファシリテーションやワークシートが、子どもの対話の質をどう高めるかを分析しています。

（４）教師の発話

授業記録を分析し、曖昧な指示・発問を改善しています。教師の発問等を明確にすることが、生徒の安心感や考えの深まりにどう影響するかを検証しています。

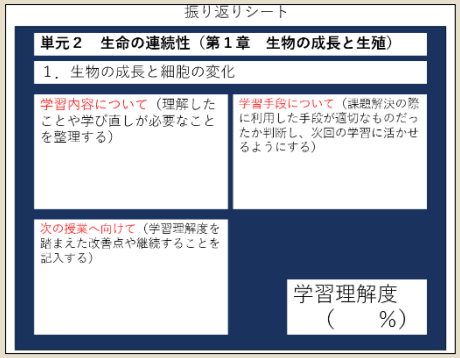
授業記録から課題を分析

項目	授業場面	生徒の反応	教師の課題
指示	「絵を見て英語で言い合って」	単語？文？と戸惑う	表現レベルの明示が必要
発問	「クイズをペアで考えて」	英語？日本語？迷う	言語モードの明示が必要
説明	“When”の説明	「When I soccer」など誤用	文構造と使用場面の具体提示不足

（５）振り返り

他者の意見を取り入れた振り返り活動を通じて、子どもが新たな気づきを得て、自己調整力を高めるためのプロセスを検証しています。

振り返りシート



３　今後の展望

各研究テーマは相互に関連しており、「声」を研究の核として重視しています。声は、子どもや教師はもちろん教科書や調べた情報などに「言葉」として表れます。今後は、テーマに基づき「声（言葉）」に着目して多角的なデータ収集と、部員間の実践共有を強化し、市内の学びの向上につなげていきます。

「外国語」研究部会の中間報告　部長　石　川　亜　紀

テーマ：外国や外国語への関心を持ち、積極的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする、「英語が使える岩見沢の子ども」の育成

1　テーマを具現化する研究の視点

視点１　小３から中３の「学びの連続性や系統性」の整備・充実
視点２　相手意識をもった、「必然性のある言語活動」の在り方
視点３　「理解」と「表現」の充実をめざす ICT の活用

（1）視点１　小３から中３の「学びの連続性や系統性」の整備・充実について「中学校段階への学びの連続性を保障する」

小５・６から中１への学びの連続性における課題の一つは、小学校で学習した表現・フレーズが、中１スタート時ですでに理解していることを前提に学習が進むことです。しかし、既習表現・フレーズに関して、繰り返しの復習や学び直しの手立てがありません。そこで、辞書のように使えるものがあることで、自分に合った学びを進めていけると考え、「フレーズ一覧」を作成しました。

また、今後、小３・４の外国語活動から小５・６への外国語、小６外国語から中１外国語科への学びの連続性について授業研究を通して検証します。

（2）視点２　相手意識をもった、「必然性のある言語活動」の在り方について「話すこと（やり取り）の発展的充実をめざす」

昨年度に当部会で作成した「学びの地図」では単元ごとの「パフォーマンス課題（学習した表現を使っての会話・スピーチなどの発表）」が設定されています。今年度は、話すこと（やり取り）の充実をめざし、毎時間の即興英会話に使えるテーマリストづくりに取り組みます。また、授業実践を通して、必然性のある言語活動について検証します。

2　研究実践の具体

（1）中学校段階への学びの連続性を保障「表現・フレーズ、意味リスト＋音声」

小５・６の単元ごとの表現・フレーズ一覧「表現・フレーズと意味リスト」と、ALT の協力で音声データを作成し、子どもが手元に置いて辞書のように利用できるようにしました（ロイロノート資料箱、岩見沢市共有）。小３から小６までに指導する 600～700 程度の語は中学校での学習の土台であり、また、繰り返し学ぶ中心的語彙となります。「書くこと」でみると、「発音を聞いて大文字、小文字を書くことができる」「音声で慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す」「音声で十分に慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す」ことが求められています。５・６ 年教科書にある単語の練習帳を試作しましたので、各学校でお試しください。

（2）相手意識をもった「必然性のある言語活動」北村小　授業研究

９月 25 日に、北村小学校にて授業研究を行いました。横山教諭と ALT の James Retting 氏による、５年生「Lesson５　I can run fast.」の授業を公開し、授業後に協議を行いました。

授業は「できることを相手に伝えよう」を目標として、ALT に対する面接試験の場面が設定され、相手意識をもった言語活動が展開されました。具体的には、自分のできることを１つないし２つ選び、「I can～」を使った英文を考え、練習し、面接官に聞かれた名前とできることを答える活動です。最後に面接官から職種が書かれた合格通知を手渡されました。この単元では数ある表現の中で「I can～」だけに厳選したことで、何を学ぶかが明確な授業になっていました。

授業は挨拶、曜日、天気など短い会話で始まり、リアクションまでを一連としたカードゲームでの「やりとり」を毎時間繰り返し、リアクションに慣れていく場が設定されていました。

授業の終盤は、振り返りを記入、「書くこと」のアルファベット練習の時間が保障され、子どもたちは４つの課題から各々自分に合ったものを選び、個別に取り組んでいました。

到達すべきゴールが明確な学習活動、繰り返し練習できる時間、選択できる課題など、子どもに寄り添った学びが展開されていました。また、45 分の授業の中にグループでの学び、一斉での学び、個別の学びがあり、子どもたちがそれぞれの場で英語でアプローチする姿が見られました。

協議では、到達すべき目標の授業案への明示、学習活動の量の保障や振り返りの基準などの課題も見えてきました。これらの実践の成果と課題を生かし、学びの連続性と系統性、相手意識をもった言語活動、理解と表現の充実をめざす ICT 活用の３つの視点から「英語が使える岩見沢の子ども」の育成をめざし、外国語部会として実践研究、検証をすすめていきます。

次号（１７８号）では、残りの部会の中間報告等を掲載します。